

## 比較文化論 : 大項目別報告 : 発火法 2900

著者	豊田 由貴夫
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	117-119
発行年	1990-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003692">http://doi.org/10.15021/00003692</a>

## 発 火 法 2900

豊 田 由 貴 夫\*

1. はじめに

2. 結果

### 1. は じ め に

発火法としてとりあげられた項目は発火錐 (fire-drill), 発火鋸 (fire-saw), 発火籐 (sawing-thong), 発火犁 (fire-plough), 火打石 (flint), 火打金 (flint and steel), 発火ポンプ (fire piston) の合計七つである。火打石, 火打金とを一緒にまとめてあつかう可能性も検討されたが, データとしては別々に出力してある。また, 中間報告では磁器片で表面のあらい竹をたたいて火花をだす方法の追加が示唆されたが, これはとりあつかわれなかった。

発火法の記載された民族例は112例 (東南アジアが67例, オセアニアが45例) であり, 中間報告の43例よりも大幅に民族例がふえた。しかし, あとにふれるように個々の発火法をみても, その記載例はもっとも多い場合で39例であり (火打石2905), その分布を分析し, 他の文化要素との関連をさぐるにはかならずしも十分とはいえない。

4種類の相異なる発火法が用いられていると報告があるのは Tanala, Palaung, Banggai の3例で, 3種類の方法が記録されているのは Tsimihety, Daffa, Lakher, Antaisaka, Eastern Toradja, Wemale, Tagbanua, Atayal, Austral, Seltaman の10例である。このほか, 二つの方法が記録されているのは19例, 一つの方法では76例である。

また発火法の種類別にみても, まず発火錐は27例, 発火鋸が16例, 発火籐が21例, 発火犁が29例, 火打石がもっとも多く39例, 火打金が29例, 発火ポンプはわずかに1例のみとなっている。

地理的な分布の傾向, そして他の文化要素との関連をとらえるためには記載されている民族の数はかならずしも十分とはいえないが, 中間報告で指摘された諸点の検証

\* 亜細亜大学経済学部

と、従来の発火法にたいする報告を検討してみたい。

## 2. 結 果

1) 発火法は、マダガスカル、アッサム・ビルマ、台湾、大スンダ列島、ニューギニア、オーストラリアと、対象とした地域にひろく分布している。ハリソン (Harrison, H.S.) によれば、ポリネシア地域では欠如し、しかもポリネシアでは発火犁以外の発火法が用いられないとされているが、Samoa と Easter とで、発火錐の存在が記載されており、これは検討されるべきである。

2) 発火鋸は台湾、マダガスカルをふくめ、東南アジアにひろく分布しているが、オセアニア地域では、3例、ニューギニアにその分布がみられるだけである。ほかにフィリピンや Nicobarese にも存在するとの報告 [BALFOUR 1914: 32] があり、またオーストラリアにも存在するといわれる [HARRISON 1975: 220] が、今回のデータにはふくまれていない。

3) 発火籐はインドからインドネシア、ニューギニア、オーストラリアにかけて分布していると報告されていたり [BIRKET-SMITH 1965: 70]、アッサム、インドネシア、メラネシア (ニューギニア) といわれる [HARRISON 1975: 221] が、記載されているのは東南アジアとニューギニアのみである。オーストラリアが抜けているのは、フレーザー (Frazer, J.G.) による「やわらかいのこぎり」(「やわらかい細い茎やつる、あるいはそれにあつた材料を使い、それを竹や木にあてて、のこぎりのように前後に引く……」[1981: 333]) の分布に一致する。

4) 発火犁がオセアニア地域に特徴的であるとの、中間報告での所見は今回のデータで確認されている。28の例がメラネシア・ポリネシア・マイクロネシアの各地域で広範囲にみられる。ただし、オーストラリアでは1例も記載されていない。また、マレー半島とインドの1部にみられるといわれている [BIRKET-SMITH 1965: 70] が、オセアニア以外では Palaung にその例がみられるだけである。

ニューギニアでは発火犁が標準的な発火法であり、南側と西側にオーストラリアの典型的な方法である発火錐が存在し、中央高地に典型なのは発火籐であるとの報告がある [CRANSTONE 1972: 734] が、発火籐に関しては今回のデータとかなり一致するとしても、発火錐と発火犁に関しては記載のある民族数が少ないため、この裏付けは検証できなかった。

5) 発火ポンプは、ビルマ、マレー半島から東南アジアの島嶼部に分布するとお

もわれ、またその分布とマレー式ふいご (2703) の分布との関連についてはその検討の必要性が中間報告で示唆されているが、発火ポンプの例が Iban の 1 例のみであり、その関連性については指摘することができない。ただし、Iban についてはマレー式ふいごは確認されている。

また、中間報告で指摘された発火ポンプと吹矢 (1101)、キンマ用の筒と棒、真ちゅうの大砲など (今回の分析ではこれらは文化項目としては設定していない。ただし、キンマ噛みは 1404) の分布がかさなるという Harrison の説 [HARRISON 1975: 227-228] も、発火ポンプの例が 1 例のみであるため、依然として確認はできなかった。ただし、Iban では吹矢、キンマの利用は存在するが真ちゅう製造 (2707) は記載されていない。

6) 火盗み神話 (4307) と特定の発火法との関連については、中間報告でもとくに結びつきが指摘できず、今回も特別の関連は指摘できないが、これは火盗み神話の記載がある民族が 7 例と、きわめて少ないことにも起因する。ちなみに火盗み神話が報告されている民族とその発火法は以下のとおりである。Andamanese (発火法の記載なし)、Ao Naga (発火籐と火打金)、Lakher (発火籐、火打石、火打金)、Southern Toradja (火打石)、To Mori (火打石)、Niue (発火法の記載なし)、Yimar (発火籐) の 7 例である。

7) 中間報告でも、民族誌に発火法のような生活の基本的な技術の記載が少ないというのは指摘された。この点に関して、それぞれの発火法と共有民族を多くもつ他の文化項目をみると、発火法全体で他の民族と共有される文化項目については、共通の分布がある程度存在する。たとえば、ニワトリ (1320)、ブタ (1321)、方形プラン (2109)、焼畑耕作 (1312)、掘棒 (1313)、単純土葬 (4101)、婚資 (3204)、ふんどし (2309) などには特定の発火法を問わず、発火法全体で他の民族と共有されている例が多い。ただし、これらの文化項目はいずれも記載されている民族数が多く、大部分が 150 例以上の記載があるものばかりである。つまり、発火法にかぎらず、ほかの文化項目でも上記の文化項目とは共有されている場合が多いのである。ただし、これらの文化項目をみるならば、高文化諸族の影響をうけていない地域で発火法の報告が多い、つまり、高文化諸族の影響をうけている地域では発火法の報告が少ないという傾向は指摘できるかもしれない。